

「國木田獨歩」讀書メモ

①

平成三十二年九月五日

へはじめに

今回の作品は、昭和二十六年刊行、創元社版「國木田獨歩作品集」全三巻の解説として書かれたものである。當時、小林秀雄が創元社の経営者に参予してゐた様で、創元社社長と恒存も何らかのつながりがあった様だ。芥川、太宰の作品集の解説も担当してゐる。友人の松原正氏も、この頃、創元社の社員だったらしい。この作品の冒頭で、恒存は少年時代に獨歩から大きな影響を受けたと述べてゐるが、昭和三十二年刊の「近代日本文學の系譜」第七章において、獨歩の近代日本文學史上における位置を、芥川の先蹤とるし、恒存なるまでの視点から、獨歩の紅事に光彩をよへてゐる。また、創元社版、芥川の作品集の解説の中でも、芥川の獨歩への親近感にふれ、両者の近似性への関心の深さのうかがへる（昭和三十五年刊）。恒存が獨歩の文學にみかれたのは、何故なのか、今回の作品と、それ以前の言及から考へていくと、恒存が追究し続けた「近代日本文學」にほいた「特殊性」が、いかに明らかにされてくることかわかる。獨歩の「人と作品」についての解説は、多数書かれてきてゐる。たうが、恒存の解説は、批判、評價の視点から一貫してとり、明治以降の作家達から西洋化の渦中で、いかに彼我の本質的な差異と対峙し得たかに向けられてゐる。恒存の解説によつて、批判されたにせよ、評価されたにせよ、それらの文學者の、文學に対する姿勢が、本質的に浮彫にされてくる。この作品も、獨歩の「人と作品」を解説して、獨歩の文學の魅力と際立ててとり、讀者への意欲が湧いてきた。そこが、恒存の文章の魅力なのだと感じている。

・ 獨歩は今日もなほ 古くはなない。近代日本の若々しい
新鮮な魂の流露が感じられる彼の作品は、青少年の
純粋な魂をゆりうつかす、永遠の若々しさを持つてゐる。

一章

・ 日記「欺かざるの記」について

作者と作品との関係が、手にとるやうにわかるか。作品の
純粋な鑑賞が妨げられる心配もあるので、小説か、讀み
はじめた方がいい。

・ 作品集と主要作品の刊行時期について

作家活動は明治三十九年～明治四十一年の
十余年。短篇小説五十余篇が残された。

二章

・ 明治三十年前後の文壇の状況

硯友社全盛

⇒

↓ 觀念小説の動きも（泉鏡花 廣津柳浪らと）

「文學界」浪漫主義

干駄木 永、めざまし草子

早稲田 永 逍遙

鷗外が指導

・ 明治四十年には、自然主義文學が主流

・ 獨歩の立場 局外者の立場であった

初期「浪漫主義」

晩年「自然主義」

✓ 両者とも 藝術家至上主義の根本
精神であるが、獨歩は、それからは疎外されて

・「文藝界」の浪漫主義作家
自然主義作家

✓ 藝術家至上主義

・獨歩は、自己の天職としての詩人であり續けたかった
にはたえず文藝にむかひて聞かれてゐたか、文壇からは
遠ざかうとして、不利な事業に心身をすりへしてゐた。

四章

・実生活からの感動を激しく生きぬくためには、その実生活に
身をまかせ、その流動感を、新鮮に味はうことに他なるない
その新鮮な情熱こそ、天職としての詩人において完全燃焼
されたと感じてゐて、固定的な作家、稼業かゝる身を
遠ざけてゐたか

・実人生に対してつねにロマンチックだった
晩年の表現方法は、リアリスティックな視覚に変わつていった

・ヨーロッパのロマンティックに見られる傾向
(英國の)

・英雄や宮廷人に対し、貧しきもの、名もなき者への関心
・都会の形式化に対し、田園の素朴な生活や、自然現象への
微妙な変化の發見

←
←
これか、そのまま獨歩の作品の大きな魅力となつてゐる。

←
近世日本文學史における正統的なロマンティック

←
この延長線上に、正統的なリアリズム文學が
生まれる可能性を持つてゐたといへる。

・獨歩の作品の主人公は、渺たる一小存在だが、その作りの如くは、一茶館主のうちに、時空を絶した生の真相を「発見」しようとしてゐた。

五章

・「驚き」したいといふのが、僕の願なんですよ、このことば
感動への要求、つまり、生の充實感の意識を意味してゐる。

・生の感動、愛の新鮮な感動を求めたために、

・局外者のやうに、旅行者のやうに生き、書いた

・実際には、泥沼のやうな人間関係の中に
わづらひ、飛び込んでいった

⇐

表面的には、自己の感慨を歌つてゐるやうにみえながら、
作者は、つねにその画面の外に局外者として立てゐる
⇐

この「生の分離」こそ、近代理智の出发点であり、
詩人の本質的条件ではあるか

獨歩は、近代日本の生活と自然とを新しく
発見し、それを新しい表現法によって
定着した作家

六章

・「ガイナミック」な動的な長篇小説

主人公や作者の精神が、創作過程を通じて変貌をとげる

←
時間と原理

・スリッパ(静的)な短篇小説 ↓ 空間の原理

作者の精神変貌の過程は、見出せるい

描かれてゐるのは、永遠になった(瞬時の人生断面図となる
この一瞬時において、時間は停止し、永遠が現出し、
静的な状況となる

・ 獨歩作品は、すべて静的性格と「落ち」を持ってゐる

七音

・ 落ち

現實的な日常生活や、作品中の散文的な事象の世界から
一挙にして、抽象の領域に飛躍する スプリングボードの役割
飛躍を可能ならしめるものは、作品の裏打ちとなるしてゐる作者の
精神であり、詩といつてもよい

・ 強烈な精神を持って 飛躍(リダ)をも具象化し
永遠のうちに定着せしめる ↓ 短篇小説の真髓

八音

・ 獨歩の文學形式

自己の生活と社會との関係を切断し、次に、兩者の
つなかる場所を、永遠のうちに見出さうとつとめた
←

・ 自己の生活体験を、なまな告白によつて、社會と
つなかうとした 私人説とは根本的に違ふ

・ 完全な告白など、できるものはない
自己などといふものは、どうもよくない、實生活に
おいては、あくまで一市民であらうとした

・ 自己のことを考へてゐない人間、自己の運命も意識してゐない人間を、
抽象的な永遠の世界に織り込もうとする情熱の激しさ故の
短篇形式であった

・ 丹念にリヤリストイックに徹する生活を追つて、
描かうとする、具象的情熱に缺けてゐた

・欺かざる日記

死後に出版された千四百三十四頁におよぶ大冊の日記
内容は、冗漫・重複・千篇一律の感傷文字の観があるが
獨歩の本質を理解する上では貴重なものと云へる

・獨歩の文學の主題は、生の意識の充實」といふことであつた

美しい花を眺める喜び
親しい友と交る喜び
↓主観的る生の喜びといふ同一



花や友人といふ対象に向はすは生の意識の純粹なる
昇華にのみ、内面的志向を持つた

・感心する二つは……

(一)當時の既成のことは、限界を突き破り、自己の欲望を満たさうとし、
自己の主體に固執したこと

(二)激しい日印揚感にひたりながら、その日印揚感そのものは、創作の場にな
しなかつた。主観の流れるままに作品を書かへたこと

・獨歩は、自己の資質として背負はされた本質的る主題「神對自己の
問題に固執したか。當時、本質的、抽象的る問題と処理
する言葉が存れしてゐなかつた

エマソン、カーライル、フーバー等々の作品の中に、ひうのかりとなる
言ひ言葉を見出ださうと懸命なつたか、未だ熟さぬ言葉で
あつたため、ひとりよかりともるり不満もあつた

・革命期の子として、まあ、あまりに本質的る主題に固執したため
過去の文化財を無視してしまつた、無學故の錯誤

西洋の深い傳統に根ざした本質的、抽象的る主題になし、
傳統のこもつたことばを用ゐず、素朴で深入りしてゐたため、
當るためりさせざるを得なかつた

・英雄と凡人との対立

英雄と凡人といふ一見矛盾する概念を結びつけようとする
努力が、「欺かざるの記」の主題

・ところが凡人も特殊人になり得る道を求めた

←

自己の生を意識して生きることをかゝる生の内容を感ぜんと
いふことと地をうさう

・この様子を矛盾する概念の統一にまで自己が昇華するのと
得て、作品を書き始めた

←

徹底した理想主義者であったにもかかはらず、かれの作品からは
作者の自我意識といふものを感ぜる。澄明である。
彼の自我意識も實際生活も、欺かざるの記という時代に抹殺
されてしまい、この日記によつて自己を社会化したと言へる。

〈感想〉

獨歩作品集の解説として書かれたこの獨歩論 全九章下は
短文から、一章を追ふことに、獨歩の本質に迫るその
展開が、見事である。特に 六、七、八、九と讀み込んで
いくと、獨歩の短篇小説を「靜的性格」と「落さ」といふ表現で
分析し、「落さ」が「散文的な事實の世界から一挙にして
抽象の領域に飛躍する」スプリングボードの役割をしてゐると
する。さういふ九章で、「欺かざるの記」といふ一見冗漫長大
な日記を終了した後、人創作を始めたその理由を、
必然性があると分析してゐる。恒存に言はれるとハッとすると、
恒存の作家論、文學論は、着眼点から、独創的であり、
論じられぬ作家は、恒存の表現の世界に、投げあがられ、
確固たる位置をよへられ、輝きはじめるのだ。この様子を
表現で定着せられた獨歩の文學は、確かに「永遠の
若さ」を失ふことばないであらう。

さて、恒存は少年時代に獨歩の文學から大きな影響を受けたと述べてゐて、近代日本文學の系譜として章の中にも、今日でも獨歩はその讀者層を多く成長期の青年たゞけに留めておらず、むしろ職業的文壇人や文學青年たゞけに留めておらず、その理由の大半は、彼の文學が近代日本文學の主流たる自然主義的發想のそれにあつたために他ならない」と述べ、ここから恒存の文學觀及びあるべき文學者像がうかがへ、興味深い。獨歩は自己の天職としての詩人であり續けたかつたと恒存は見てゐて、それはつまり、感動への要求、生の充實感への意識を求めたのだとする。さういふ獨歩が藝術至上主義にならざる「表面的には自己の感慨を歌つてゐるやうにみえるが、作者は、つねにその画面の外に局外者として立つてゐる」といふ、この「生の分裂」を意識した創作態度こそ、近代理智の出發点であり詩人の本質的条件ではないかとする。恒存の獨歩を論ずる観点は全く新鮮で面白いし、獨歩への評價が、そのまゝ「自然主義的發想」への否定、嫌惡に止つてゐることか、つくづく感ぜられる。これは、少年時代の恒存にしてすむに好き嫌ひのレベルにおいても、センチメンタリズムの厭味、や「あまりに空疎な自己主張」などを否定する感性を擧げてゐたに相違ない。昭和四十九年に至つて「獨断的な餘り」獨断の道にありても、「自然主義的發想」に我慢がなうまい、感性は全く変はらず一貫してゐる。この激しきは、文壇、論壇において、あまり受容されなかつた（理解されるかつた）かも知れないが、ここには、恒存の文學界の（評論の）群を抜き、去る面白さがあるのだらう。それは正に、生の充實感、味はふいふと世界だと思はれる。